

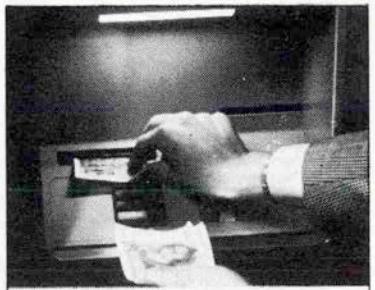




# ブレッソンの『ラルジャン』 曇った冬空を思わせる映画

淀川 長治

〈映画評論家〉



ロベール・ブレッソン監督のフランス映画「スリ」*PICKPOCKET*（一九五九）を見たときのショックは今でも忘れられない。日本封切から二十六年もたつたのにそれを昨日見たという感じ。一時間十四分のモノクロ作品なのに、あたまのなかではブレッソンのあざやかな代表的名作として記憶されている。スルことが病みつきとなつた青年が競馬の競技場で自分の目の前の婦人の手

さげかばんから金を盗むところのこわさが今も目に焼きついている。映画は小説や舞台劇どちらがつてキャメラを婦人にちかづけて婦人とそのうしろの青年を画面いっぱいに見せる。競技見物に夢中の中年婦人の顔と今しも盗みにとりかかる青年の顔。つきのカットで青年の片手の指三本が婦人の肩から吊り上げているかばんのふたの金どめをひらく。指がかばんの中に這入る。つきのカットで再び正面からとられた婦人の何も知らぬ顔とその婦人のうしろにぴたりとくつついた青年のこわい顔。これを同時に見せる。ついに青年は婦人のかばんから金をとつた。まだそれに気がつかぬ婦人。このふたりの顔を私たち（観客）は正面からひとつのシーンの中に見る。自分が盗まれているごときこわさが迫る。ブレッソンはこのスリ青年の苦しみを描いて、映画が人間の業（ごお）をかくまでもフロイト的にえぐりだすかを、それを映画美術をもつて、ブレッソンは、おどろかせ、こわがらせた。

このブレッソンは二年に一本、三年に一本。このような作り方をする監督である。そして「たぶん悪魔が」（日本未封切の一九七七年作）からなんと六年ぶりに「ラルジャン」*L'ARGENT*（一九八三）を発表した。そしてこれがフランス映画社の手で輸入されことしの年末に封切というブレッソン・ファンにはこうふんが訪れた。「田舎司祭の日記」「抵抗」「ジャンヌ・ダルク裁判」「バルタザールどこへ行く」「少女ムシェット」「やさしい女」「白夜」などのブレッソン映画が日本では公開されている。そしてそのどれもがサイレント映画を思わせる静けさのなかにブレッソンの映画詩がうたわれてきた

×

「ラルジャン」（金）はトルストイの一九一一年の遺稿として公表された中篇小説『にせがね』からブレッソンが脚色し台詞も書き監督した一時間二十五分のフランスとスイスの製作のこれはカラー映画である。はなしは現代のパリになつており、高校生が父に小使いを余分にせがんだところ父にことわられ、借金が返せなくなつてクラスマートに相談する。そのクラスマートは一枚のにせ札を持っていた。五〇〇フランのにせ札だ。二人でそれをもつて写真店で安いがくぶちを買い、まんまとツリ銭を取つた。店主はそのにせ札を、にせ札と発見しないで、ブレッソンは、おどろかせ、こわがらせた。

・バティ）のガソリンの集金にはらつてしまふ。なにも知らぬイヴォンは昼食代をその札ではらつたが、にせ札とわかり警察に通告される。このイヴインには幼い娘と妻がいる。裁判となつてイヴォンは有罪となる。最初ににせ札を使った少年、その少年の顔をおぼえている写真店の主人の妻。映画は一枚のにせ札が、それを使ったことから、それをめぐる人たちを、復讐と怒りと悲しみをも加えた大きな罪へとひろげてゆく。そしてそれは大きな罪と同じだけのこわい大きな悲劇を生んでゆく。

×

高校生がにせ札を使ったことから始まつてこの映画が殺人というような悲劇へとひろがつてゆくこわさをブレッソンは叫声をあげて作つてはいない。問題は罪の意識を知らぬ高校生を見つめているこの映画のこわさであった。それを無言にちかい静けさで見つめているブレッソンの目のするどさが、叫声をあげてこの少年そしてこれらの大人の罪をただすのではなく<sup>かみやか</sup>観客の目と心にその罪の底知れぬ深さを無言の鞭ともいえるきびしさで示すのであつた。この映画はむしろドストエフスキイに近い。人が自分ひとりを守るために他人に犯す罪が、やがて一人の人間を狂わせてしまつまでに残酷に追いつめてゆく人間悲劇。日本映画が、かりにかかる人間悲劇を描くとすると、それはもう暗く苦しく悲しく映画館にはいつて苦しんでくるだけのシンコク映画にしかねぬがフランスのブレッソンはこの「ラルジャン」をピアノのソロでも聴くような画面の美しさのなかで、見たあとはじめて「罪と罰」を読み終つたかのようないいとんでもない人間のこわさを、人間の悲しさを、見せきるのであつた。イヴォンに扮した俳優をはじめすべて日本ではあまり知られぬ俳優を使つていて、かえつて、ドラマだとか劇映画だとかといった映画からの外の空気がはいつてこないことで真実というか実感というか、見つめているこの映画の中から吸いこむ「人間悲劇」がまっすぐに見る人にしみこむことになる。



イヴ オンに面会に来たエリーズ





●家庭的な雰囲気のある店にしたい  
大石 マキさん <㈱ファミリア西部  
小売部芦屋店>

5年前まで専業主婦だった。北野坂店でのアルバイトが縁で、今回はラポルテ内の新店舗を任せされることに。「最初、働くことにいい顔をしなかった主人も、今は料理をしてくれるほどになりました。娘や母の助けも得て、楽しくお仕事をやって行きたいですね」と語る。「母」のキャリアは、そのままファミリアに生かされているようだ。



## ART

### 石阪春生近作自選展

10月30日から11月4日までの6日間、元町の丸善で石阪春生さんの近作自選展が丸善の元町開業50周年の記念行事として催された。

'84年から'86年の間に描かれたデッサン5点、版画2点、油彩9点の計16点が展示され、テーマはこれまでシリーズで展開している女のいる風景。「最近の絵の方が気に入っている。色彩もクリアで、存在感がはつきりしている」と石阪さん。

「民家の廃墟嗜好」のもの憂げな表情の女性がかもし出す雰囲気は、獨特で、ファンを魅了する。

## TOPICS

### 「造本・装幀の美——須川

誠の仕事」10月16日から21

日まで、丸善神戸元町ギャラ

リーで開かれたこの展覧会

は、須川一さんの「造本・装

幀の技術」を紹介するもの

だ。誌誌や文庫本などの、手

軽な本が好まれる一方で、手

に残る冊を大切に残したい

と願う愛書家も少なくない。

須川さんはそんな声に応え、

地道な本造りを続けている。

この展覧会は、明治中期に

創業し、高度な技術を要する

書の製本も手がけたという

祖父、そして、その技術を受

け継いだ父への敬意でもある

。昨年、製本技術優秀

●「造本・装幀の美——須川

誠の仕事」10月16日から21

日まで、丸善神戸元町ギャラ

リーで開かれたこの展覧会

は、須川一さんの「造本・装

幀の技術」を紹介するもの

だ。誌誌や文庫本などの、手

軽な本が好まれる一方で、手

に残る冊を大切に残したい

と願う愛書家も少なくない。

須川さんはそんな声に応え、

地道な本造りを続けている。

この展覧会は、明治中期に

創業し、高度な技術を要する

書の製本も手がけたとい

う。昨年、製本技術優秀

●「造本・装幀の美——須川

誠の仕事」10月16日から21

日まで、丸善神戸元町ギャラ

リーで開かれたこの展覧会

は、須川一さんの「造本・装

幀の技術」を紹介するもの

だ。誌誌や文庫本などの、手

軽な本が好まれる一方で、手

に残る冊を大切に残したい

と願う愛書家も少なくない。

須川さんはそんな声に応え、

地道な本造りを続けている。

この展覧会は、明治中期に

創業し、高度な技術を要する

書の製本も手がけたとい

う。昨年、製本技術優秀



### ●カメラより

「雪だるまのクリスマス」をTOYS & FANCYGOODS のカメラや新製品の「雪だるまのクリスマス」を5名様にプレゼントします。かわいい雪だるまの形がジングルベルの曲に合わせて動きます。クリスマスプレゼントにもピッタリ。受け取りは編集室まで。



### ●季節茶屋菊水より

#### 御飲食券を

大丸B1Fにオープンした季節茶屋菊水より御飲食券を20名様にプレゼントします。和三盆ぜんざいやおしるこ、みつまめなど甘党にとっておきのメニューです。お好みに応じてオーダーできます。はんなりとした味は絶品。ぜひご賞味ください。

## PRESENT CORNER

応募方法 ●葉書に住所、氏名、電話番号、希望する商品名を明記の上、神戸市中央区東町

113-1 大神ビル9F 「月刊神戸」子」神戸百

店会プレゼント係までご応募下さい。12月20日消印まで有効です。当選者には神戸「子」から当選葉書を発送、葉書を持ってお店まで、プレゼントを受け取りにお出かけ下さい。



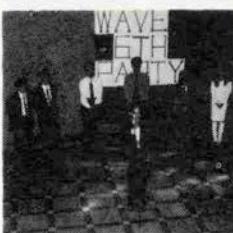


★7周年へ向けて快調の

ウエーブ、店舗も3つに  
サテンドールを振り出し

に独立し、ウエーブをオーブンした井上豊氏が6周年のバーティを10月19日、ディスコ・ヴイングで催した。

ウエーブを皮切りにBA



挨拶する井上さん（中央）

■ビジネスホテル第2北上地下

3392-3166

★“多国籍”ファッショニ

ショップ誕生

「面白サンデー」や「エン

ドレスナイト」で紹介され

てからすっかりおなじみ、

多国籍料理の「ニュートン

サーカス」に、この度「ニ

ットブティックカズ」がオ

ープンした。



明るい雰囲気の外観

★忘年会・新年会は

お得な“花心”へ

三宮で有名な阪急三宮駅北側の「あじびる」4Fに、

花心がオープンして半年近くたった。平日はしやぶし



チーフの河野整さん

■中央区北長狭通3-11-10

3332-6306

「多国籍料理も伸縮自在のニットも、『自由』の象徴』  
という池田さん。衣食同根のクロスオーバーファッションショップだ。

●神戸うまいもん  
とドリンキング

青柳

（あおやぎ）

鰻料理

中央区元町通3丁目11-14  
3331-2292

11AM-9PM 日祝休

元町商店街の一本北側の通りにある青柳は、昭和22年創業の老舗。鰻料理を中心に、季節のものを使つた一品が美味とグルメたちに好評だ。

鰻は、関西風直焼で蒲焼き上がり2000円、中が1700円とお値段も手頃。タレをぬらずにさしみ醤油で食べる白焼も



人気のメニュー。

白木造りの落ち着いた店内

R DAY、炭火串焼のイフと順調に3店舗に増え、脂が乗っている井上氏。「お客様への感謝をこめて楽しめ」と企画を盛り沢山に組みました。チャリティーの売り上げは厚生事業団へ寄付します。歌つて、踊つて、飲んで食べて、ファッショニングを楽しんで最高の一日にしたい」と20名のお客さまに挨拶。スタッフも悪のり気味のバーティだった。

アンゴラやモヘアなど超級素材を使つたセーター類がズラリ。いずれもここでしか買えないオリジナルだ

よ。」「絶対お得ですよ」と河野整チーフは語る。中だ。お昼の定食も100円から1300円で6種類が揃つており、お昼どきは近くのOLや会社員で賑わつてゐる。

■中央区北長狭通1-4-2あじび

0F 3332-3456年中無休



ゲストに、映画評論家の

「遊びの精神の中での芸

る14人の作家・工人による

淀川長治さんを迎へ、「いい

映画を観たときは、機嫌

術性の発見になつてくれれ

もいいし、人にやさしくな

ば幸いです」と中西勝さん

は語ついていた。

れる。そして何よりも元気

がでる」と。映画の話、幼

少の頃の話、最近感動した

話など、ユーモアをとりま

せ、1時間半以上の熱弁で

観客を酔わせた。最後は、

97歳の元気な中井一夫元神

戸市長と固い握手を交わ

し、淀川さんもびっくり。

★中西勝の自選展

本誌「セカンドカバー」

でおなじみの、中西勝二紀

会兵庫県支部長の自選展が

9月4日(火)より29日(土)まで国

際会館4Fの

兵庫県民芸部において行われ

た。

過去の数々の作品の中か

ら、「春(椿)」「ロバと老人」

「赤いマフラーの娘」等、

合計10点の作品が選ばれ、

りげなく並べられた作品部

は、ゆったりとした空間の

中で、新たな印象を訪れた

人々に与える。

★ナツカシキ木工品たち

「使つた人の愛撫心」が

「誠実美」を湛えていると

俳人の永田耕衣氏が讃美す

る木工家の笹倉徹さん(47

歳・多加郡加美町在)の第

二回個展が、十月二十九日

から十一月三日まで北野坂

のダイヤモンドギャラリー

で開かれた。

櫻、杉、タモ、柘、楮、

神代タモ、屋久杉など様々

な素材で、食卓、座卓、朝

鮮棚、文机、膳卓、衝立な

どの他に、永田耕衣氏の色

紙に合せた額縁などアーチ

の他に、永田耕衣氏の色

紙に合せた額縁などアーチ

の





神戸で初めての  
韓国スナック **世宗**  
が 11月 5 日に open

'86 ソウルアジア大会も盛況裡に終り、  
いよいよ '88 ソウルオリンピックに向  
けて韓国は躍進しています。おかげさ  
までもちまして韓国料理「鳳仙」も開  
店2年目を迎ましたが、この度韓国  
スナック「世宗」(セジョン)をお手軽  
な料金で楽しめるようにと開店いたし  
ました。ぜひお立寄り下さいませ。

李 元仙



神戸のアーチストと共に

韓国スナック **世宗** 3F ☎ 392-1727

姉妹店／ 韓国料亭 **鳳仙** 6F ☎ 391-2147

神戸市中央区北長狭通1-6-10 ニューキャスルビル

三平の

## やぶにらみ見聞録

へ最終回へ

小関 三平

(神戸女学院大学教授)



カメラ／池田年夫

# 生き耐えて、息絶えず… 根づいて十年—『ふえろう村塾』

神戸市は、大都市では珍しい「農業公園」なるものを、持っている。もっと農業に関心を、という趣旨だろうが、じつさい、市域のほとんどは、山間部と農村地帯が占めているのである。

ただし、農業公園の人気は、もっぱら「ワイン城」のおかげによるもので、訪れる市民の関心は、ワインとステーキの消費にあつても、「農園」とか「生産」にはないだろう。

ましてや、その近くに、有機農法を営む若もののコンミューン「ふえろう村塾」があったことなど、だれも

ところで、その「ふえろう村」が、この十一月で、創設十周年を迎えた。七〇年代にあちこちで生れた「コンミューン」が、つぎつぎに挫折して消えて行ったなかでは、きわめて稀な例外と言わねばなるまい。

それに、「有機農法」と取り組むプロ農家は、ちらほらあつても、ズブの素人集団が、共同生活をしながら十年もつづけたこれは、タイヘンなことである。少なくとも関西では、ここだけだろう。

大いに感嘆し、且つは好奇心に駆られて、私たち取材班は、小野市は脇本町へと向かつたのである。

長い新神戸トンネルを抜けて箕谷に出ると、そこからはもう、すっかり秋の色に染め上げられた山間を走る、県道五〇号線である。箱谷千年家・呑吐ダムを右にやり



ここがふえろう村の本部(上)ちょっと手伝ってみたものの…



今日は稲刈りです。朝から稲を刈り、束ね、掛けていく、ただひたすら黙々と（左）ふえろう村の10年が創り上げた顔です（華房良輔さん）

さて、そのバス停から東にガタガタ路を入れて行くと、突然、堂々たる三階建てのビルみたいなのが、目の前に現われる。これが、このコンミューーンの宿舎であり、本部なのである。いささか意外な感じがしたが、一種の下駄履き住宅で、階下は農具・工具の物置きになつておらず、目をやると堂々たる畜舎がいくつも並んでいるのですぐにナットクした。

トリ・ブタ・ウシの糞尿の臭いに包まれた、泥んこの坂道を少し行くと、稲の取入れに励んでいる若ものたちの姿が、目にに入った。馴れない手つきで、束ねた稲を稲架に掛けていく。あまり陽当りがよさそうには思えない。細長く曲りくねった帶状の、段々畠である。闖入者の気配に振り向いた一人のオジサンが、作業の手を休めて、「よおーッ」と挨拶してくれた。

過ごして、志染から三木グリーンピアへと右折・北上すると、三木と吉川を結ぶ中間点・桃坂に出る。そこから更に、ざつと三キロ西北に入ったあたりに、目指す「ふえろう村」はあつた。三宮からクルマで一時間、神戸電鉄・上の丸駅、小野駅、中国ハイウェイバス・東条駅を結ぶ三角形の真ん中あたりで、かなり不便なところである。この三点からそれぞれ、途中まではバスを乗り継げるが、あとは一時間前後も歩かねばならない。徒步五分のバス停（脇坂新田）はあつても、小野駅前からのこの路線は、一日に三便しかない。

オジサンは、今どき珍らしいラクダのシャツを着て、部厚いウールの股引きを履き、泥んこのブーツで、田んぼのぬかるみを歩きまわっている。素早い身のこなしである。腰には、包装に使う紙紐を巻きつけ、そこに抉んだワラで、稻をクルクルと束ねる。馴れた手つきである。括った稻束が幾つか溜まると、肩にかたぎ、畔道まで運んでは、また、もどる。

それが、通称「ボス」こと、「ふえろう村塾」の創始者・華房良輔さんだつた。真っ黒に陽焼けして、もうすっかり、「百姓」の顔になつてゐる。もともとの精悍さに加えて、十年の苦闘に鍛えられ、志を貫いてきた者の、風格と威厳がある。不健康な夜行性の生活を、まだ抜け出せない私など、なんとなく気押されてしまう。しかも、相手は、民放の初期以来、花形放送作家として鳴らした、プロの物書きであり、今は、大地に根をおろした、逞しい農民でもある。ところが、こちらは、泊り込みや農作業への参加もせずに、おこがましくも「ルボ」を書こうなどというのだから、内心大いに恥ずかし

く、後悔しないわけにはいかなかつた。

が、華房さんは、あたたかく気さくに、応対してくださいさつたので、私は、忙しく立ち働く彼を邪魔しながら、あれこれと愚問を發することができたのである。

意外なことに、彼はもともと植物や動物が好きで、農学部に一旦は入つたし、マスコミ稼業のあいだも、ずっと農業への夢を抱き、ひそかに準備していたのだ、と言ふ。七〇年代の農業問題やコンミューーン運動にも、刺激されたにちがいない。「村塾」とつけたのは、若ものに教えるというよりも、自分が学び育ちたいと思つてのことが、若ものが集まってきた。多くは、「大学闘争」にかかわった連中だつた。

今、初期のメンバーは、ほとんど残っていないが、「ふえろう村」は生き耐えた。経営効率の比較的良い畜産にウェイトを置いたからだろう、と「ボス」は振り返る。それに、朝獲った野菜を昼前に届けるという新鮮さも、



本当に手作業だけ、昔懐しい農業です（上）  
子連れの塾生もいて、みんなのまわりで遊びながら、時にはお手伝い（下）



消費者たちのあいだで人気と信頼を集めるにあづかっ  
た。もつとも、無農薬野菜は、やっぱり、作るのが大変だ  
し、虫取りその他の労力の割には、儲けが少ない。トマトが病気で全滅したこともあるし、天敵が戻ってきてく  
れるまでの三四年は、さまざまな虫害に悩まされる。

で、実際には、野菜のウエイトは五分の一定程度に抑えて  
あるが、品質には自信ができて、少なくとも三分の一  
は、うまくできたと確信を持って、出荷できるまでにな  
った。苦節十年の成果である。

今では西は姫路から東は宝塚・尼崎まで、特約の消費者はさつと三百世帯もあり、野菜は年間四七五〇種類も  
作れるし、畜産の方では、食肉加工業の資格も取り、立派な冷凍庫も備えている。

当然、  
「ふえろう村」の名は、全国の同業者に知られ  
訪ねてくる者もふえた。華房さんがその気に  
なれば、各地のコミュニケーションを渡り歩くだけ  
で生活で生きるほど、カオニになつた

農業を愛し、ふえろう村を愛するボス

10、新人塾生の受け入れかた  
これらから浮かび上る最大の問題は、やっぱり、「集  
団生活」のむずかしさ——とりわけ、塾生の動機や意欲  
のちがい、そして、数少なくなつたペテランたちと、一  
部の気まぐれでルーズな塾生たちとのギャップに、ある  
らしい。十人食べるがやつとやのに、十七人も居て、  
しかも、ほんまに農業が好きや言う奴なんか、ほとんど  
おらへん……というのが、「ボス」の嘆きである。

十周年祭りの前夜、食堂兼談話室には、OBたちが十  
人ばかり、集まつてきて、賑やかな酒盛りが始まつた。  
九州・高知・広島・舞鶴その他から、かつての同志が馳  
けつけてきたのである。たちまち、一升ビンがテーブル  
に林立し、梁山泊風の酒盛りが始まると、「ボス」は、  
にわかにハシャギ出した。近頃の連中は酒も飲まんから  
な、焼跡開市派の華房さんは、苦笑する。

だが、蛮カラなOB連中を、おとなしく壁際で眺めて  
いた現役塾生だって、そのうち逞しく育つかもしれない。  
たとえ一時の「居候」に終つて去るとしても、「ふ  
えろう」体験は、彼らの心深くに、一粒の麦として残る  
にちがいないのである。

それはともかく、「交流」は絶対に必要だと、彼は言う。  
競争心を駆り立て、反省を迫り、技術向上への意欲をり  
フレッシュさせるからだ。

だが、問題はあるらしく、「ふえろう通信」の三五号  
は、開村十年を迎えての反省点を、十項目も挙げている。  
1、「共同体」の内実（自主性・労務管理・私有財産）  
2、指導的立場に在る者の姿勢  
3、障害者に対する姿勢

- 4、労働意欲の個人差と生産効率
- 5、農業技術の継承と習得
- 6、収益の横這い、又は赤字
- 7、後継者の不在と永住意志の乏しさ
- 8、男女関係と性的モラルの不安定
- 9、反原発その他の運動体との交流
- 10、新人塾生の受け入れかた